

レポ ー ト

フ ラ ン ス の 現 状

——フランス文化論に寄せて——

清 家 浩

今年6月、東京で行われたシンポジウム「今、フランス文化とは——日本人の視点から」（日仏会館主催、朝日新聞社・フランス大使館後援）を紹介する6月15日付朝日新聞の記事は、次の萩原朔太郎の詩の引用で始まっている。「ふらんすへ行きたしと思へども／ふらんすはあまりに遠し／せめては新しき背広をきて／きままなる旅にいでてみん……」。このようにフランスが憧れの的だった時代がかつてはあった。「あまりに遠い」フランス。遠いが故に、そして、実現困難であるが故に、ますます、かきたてられ美化されてゆく夢。あらゆる才能が花開く自由と芸術の国フランスへの思い入れ。現代の我々は、この古き良き時代（と言っても100年はたっていない）から、なんと遠く隔たってしまったことか。昼飯を日本で取ってジェット機に乗れば、翌日は、パリで、朝食にカフェ・オ・レが飲める時代だ。学生さんからビジネスマン、年金生活の御老人まで、誰もが、特別な感慨もなしに、簡単に「おふらんす」へ行くことができるのだし、若い女性達が、事もなげに、ヴェイトンの⁽¹⁾バックを持ち歩くのだ。文化の実相を知ろうと思えば、こんなに恵まれた時代もないと言えるのだが、実情は、文化への関心は（文化の定義によるのだが）薄れる一方のように見

(1) Louis Vuitton. ヴィトンでなく、ヴェイトンが正しい発音だが、正しく発音すると、逆に、無知の輩と思われる。

えるのだ。先のシンポジウムが開かれた背景には、日本人の文化離れに対する深刻な認識がうかがわれる。日仏の文化の関係は完全に変質した。一般的には、恐らく、日本人がフランス文化から学ぶものはなくなってしまったのだ。なにも、ヨーロッパの文化が衰退したというのではなく、日本の社会、日本人の意識が変わってしまった。恋こがれていた異性への思いが、こちらの成長と共に、あちらの責任というのではなく、いつしか、醒めてしまった、という風に。が、しかし、芸術分野にかたよったフランス文化の魅力の呪縛から解放された今こそが、お隣りさん（少々、遠いが）としてのありのままの姿を観察できるチャンスとは言える。現に、学術研究書、翻訳の類から、料理、モード、観光、見聞記の類まで、フランスに関する書物は、ひきもきらず、出版されているのである。文化離れして、経済とテクノロジーに向かったはずの日本人の関心は、根強く、しかも、かつて以上に、広範囲に、フランスに向けられている。もっとも、この現象は経済戦略の一端と見なしうるものだし、これはこれで、又、フランスに対する新たな幻想と錯覚を生み出しつつあると言いうる面もある（誰かが、どこかで、イメージを操っているという印象）。初回の授業で受講生に行ったアンケートの結果がそのことを裏書きしていたようである。生徒達が抱いているフランスのイメージは、明らかに、マス・メディア、特に、テレビコマーシャルの影響が濃いものだった（とは言え、生徒達の名誉のためにつけ加えておけば、彼らの知識は、料理、ファッション、スポーツ等、風俗的なものにかたよるのでなく、政治、歴史、芸術、フランス人気質まで、幅広く、且つ、正確であり、ある程度、大学までの教育の成果を示してもいた）。

とにかく、我々は、世界の動向と無縁に生きることは、もはや、できない。外国を理解することなしには、政治、経済はおろか、我々の日常生活だって成り立たない。外国に関する情報が増加するのは自然の趨勢であるような時代にいる。当『文化論』が目ざしたのは、従来の、芸術に偏った文化の方へ生徒をもう一度連れもどすということではなく、外国（たまた

まフランスということになったが)の正確な理解ということであり、ひるがえって、日本の現状の再検討であり、我々一人一人の生き方の問い直し、ということだった。かくして、前期授業を通じてフランスのイメージは事実によって次々と修正されていったわけだが、たまたま、夏休みのほぼ2ヶ月間、フランス滞在の機会に恵まれた筆者は、ここで、滞在の報告がてら、すでに一度修正されたイメージ、習得された事実をさらにもう一度、自己の体験に立って検証してみようと思うのである。勿論、対象範囲は、フランスの風土と自然、フランス人の生活に限られることになる。授業後半で概観した歴史上の事実には触れようもない。廷臣に紛れこんだ王太子シャルルを初対面のジャンヌ・ダルクが易々と見つけ出したのは、奇蹟でもなんでもなく、実は、彼女がシャルルの私生児だったから、という説が現われ、検閲の憂き目にあったなどという話も、今回、フランスで仕入れてきたのではあるが。

1. 風 土 と 自 然

気候 フランスの気候はほぼ次の4つの型に別けられるのが普通である。①ノルマンディー、ブルターニュから大西洋沿岸にわたる海洋性気候。②地中海に臨む、ラングドック、プロヴァンスをおおう地中海性気候。③アルプス、ピレネー、マシフ・サントラルの山岳性気候。④他のフランス本土をおおう内陸性気候。

次に、筆者の旅程を示すことにする。フランスの地理を学んだ人は、この旅程が、すべての気候型を網羅していることを承認されるだろう。パリ→サン・マロ→ヴァンヌ→ボルドー→リブルヌ→ボー→ルールド→モワサック→トゥールーズ→アルビ→ニース→グルノーブル→アヌシー→シャモニ→リヨン→ル・ピュイ→ボーヌ→ディジョン→ストラズブル→コルマル→〔パリ〕→アミアン→〔パリ〕→エトルータ→〔パリ〕。これに一月のトゥール滞在とロワール河の城巡り。一週間のパリ滞在がつけ加わる。地中海側でニースにしか立ち寄っていないのは、3年前の夏休みに

この一帯で2ヶ月を過ごして風土をかなりよく知っているからである。

さて、気候の区分は、気温、日照、降雨量等、年間を通じてこそ、その特徴、差違があらわれてくる性質のものであろうが、短期間に同時に訪問してみても、それ故に、差違の実感は大いにある。何よりも気温の差。3週間(7月10日から30日まで)のフランス一周の間、暑くても寒くても、Tシャツか半袖で過ごしたとはいえ、セーターを着こんだ地方があった。サン・マロ(北部ブルターニュ)とシャモニ(アルプス)である。北部では7月でも冬の服装がおかしくないし、軽装の観光客を除けば、人々は冬の服装である。ドーバー海峡に面したサン・マロだけでなく、汽車の乗り換えで降りたレンヌでもコート姿はあった。シャモニ(標高1,035 m)は、ロープウェイで2,308 m まで上がったところの温度計が、午前8時で、氷点下1°であった。風景の違いもある。灰色のスレートを葺いた、曇天の下に屹立するような、傾斜の強い北部の家並と、茶というよりもオレンジに近い瓦をいっていて陽光の中にまどろむような南部の家並。見渡す限り目をささげるものとてなくなだらかに起伏する平野(汽車によるフランス一周旅行で最も多く目にした風景)の一方で、日本の地方の風景と変わらぬ畑と木々となだらかな山々が連なるピレネー、マシフ・サントラルの山裾。そして、むきだしの岩盤が奇観を呈する南フランスからアルプスに至る沿線。平地の色彩の変化を生み出す栽培作物の違い。小麦、牧草、ぶどう、ひまわり、とうもろこし……。気象条件の差。土地の組成の差。各地方、各都市の歴史と風土に基づく個性の差。こうして、確かに、我々は、フランスの自然の多様性に目を開かれるのである。が、これらの差違を越えて、フランスの風土に共通するものとして、我々日本人にとらえられる部分もある。それは、第一に、551,208 km² の大地の上に点在する都市の形であろう。確かにそうだと納得できる観察を引用しよう。

「つまり都市と農村の区別が一目瞭然であり、集落形態からみた都市の結晶性がすばらしい。人口50万、100万をこえる大都市でも、列車が到着する5分か10分前までは、家一軒見られぬ牧草地や耕地または森林に囲ま

れている場合が多い。自分の乗った汽車が延着するのではないかと案じていると、俄然大都会のどまん中にすべりこむ。⁽²⁾」

集落は大海原の島々のように散在する。そして、緑地に人影は圧倒的に少なく、放牧される牛の姿が目につき、これは農業国だということに得心が行く。又、次に、空気の乾燥。トイレの回数は極端に減る。尿意を催してから半日くらいは我慢しようと思えば我慢できそうだし、フランスに公衆便所が少い理由はこの辺にあるのではなからうか。又、アペリチフ（食前酒）の習慣も同根のものと推察する。1日歩けば喉はひりつくし、どこかのカフェでビールの一杯も取らずにはおれない。食事の前には（渴きをやすと同時に食欲をかきたてる）軽いアルコール、即ち、アペリチフを取ってやっと胃は活動を始める感じなのだ。今日では、食事の前奏曲として儀式化した感があっても、乾燥した空気のもとにあつてこそ生まれた習慣であろう。又、肌もべとつかないからひと風呂浴びてさっぱりしようという気が日本にいる時のようには起きない（因みに、7、8月の真夏の2ヶ月間に筆者が浴槽につかったのは2回きり。他はシャワーであり、浴びない日もあった。それで、別に、自分が不潔だとも感じなかった）。

こうして、気候が、一方で、多様な地方色を生み出していると同時に、他方で、全体に共通した生活習慣を生み出してもいるのである。勿論、こうした自然的条件の背後には宗教的理由も存在しているだろう。例えば、風呂に入らない習慣には、気候的・（農村であれば）経済的理由の他に、肉体の清潔に専念して満足を味わうのは一個の罪だという考えもあったに違いないのである。

人工と自然 いろんな土地をめぐり観光していくにつれて、我々は、自分が行っているのが単に空間の旅のみならず時間の旅なのだということに、はたと、思いあたる。歴史というものを意識しはじめるのだ。見学する建造物、あるいは、芸術作品も含めた記念の品々、それらは、地上に勝手に出現し存在してきたのではなく、過去のある時点で、人間の手がそれ

(2) 増田四郎、『ヨーロッパの都市と生活』、(1975)、p. 178.

らを創り出し、自然の中に置いたのだということが感じとられてくるのだ。そして、展開する風景のうちに、人間達が自己の生存を確立していった過程そのものを見る思いがしてくる。地震がなく、簡単にはこわれない石という素材で建造物ができているせいもあって、自然と人工のコントラストは、日本では想像できないくらいに鮮明である。各都市には、封建領主のもとで形成され整備されていった、かつては、外敵に備えて、城壁で囲まれていた区画が、旧市街と称されて、残っている（今も完全に城壁を残したところが多数残る）。家並は統一され同じ素材から成り、老朽した外観のもとで、比類のない魅力を醸しだしている。勿論、内部では現代生活が営まれているのだが。これら都市発祥の中心部の外には後に増大する人口を受け入れるべく建てられた不揃いな雑多な居住区、産業区がひろがり（この過程で城壁はとりこわされる）、現代ではさらにその周辺に、これは大都市に限られるが、高層アパートが出現する。この居住単位の外側に農地がひろがる。高みから一望すれば、この中心部から周辺へ拡散する層の区別は一目瞭然である。これが、千単位、あるいは、それ以下の人口しか持たない村落であれば風景的に言って教会が中心となる。文学作品からの引用。

「毎年、復活祭まえの聖週間にやってくる途中、遠く七里をへだてて、汽車から眺めると、コンブレの町は、ただ一つの教会堂としか見えず、その教会堂は、町を要約し、代表して、遠方にまで、町のために、町のことを吹聴しているのであるが、さて近づいてみると、野原のまんなかで…⁽³⁾」（井上究一郎訳）

集落と集落を結ぶ道路、都市と都市をつなぐ鉄道さえもが、無数の点として宣言された人間の存在を孤立から解放し同胞として結びつける絆に見えてくる。こうして、フランスの旅は、我らの祖先の営為の痕跡をたどる巡礼となってくるのである。そして、彼らの信仰と想念の結実こそが各地

(3) マルセル・プルースト、『失われた時を求めて』、筑摩書房（世界文学大系）、p. 33.

で旅人を迎える教会の大伽藍であり美術館である。ちょうど、町の外観が町の形成の過程を示してくれるのと同様に、数世代にわたる労苦が完成に導いた建物が、培われていった技術と様式の変遷を示すのである。ロマネスクの基部。ゴシックの柱…。魂の救済のために動員された、細部をもゆるがせにしない装飾の数々。一堂に集められて時代の美学と個人の夢の具現を同時に示す美術館と共に、それらは、人間精神の内実とその変容の様を見せてくれるのである。そして、連綿と続く人間達の作品の堆積の起源へと我々はさかのぼっていくことができる。ドイツの文芸批評家クルチウスが、フランスの文化概念を説明しようとして、ドルドーニュの溪谷＝先史時代へとさかのぼるのは、共感的に納得できる道筋である。

「レ・ゼジー村にあるこの先史時代の洞窟は、訪問者の視線を何千年の昔に振り返らせる。畏敬の戦慄を覚えつつ彼は過去と未来の量りがたき悠久を想う。……それにしても悠久幾万年の地球史の一小道程に人間の手と人間の精神が書き残した痕跡は、限りなく偉大に限りなく崇高に思われるではないか！」⁽⁴⁾ (大野俊一訳)

こうして、人類の創造力の所産に感銘を受ける一方で、自然の景観が、又、旅行者をひきつけてやまない。フランスの沃野の起伏と配色、河と溪谷の美しさ、地中海、アルプス……。確かに、フランスの旅の魅力は、人間の作品と悠久の自然の対比にあると言える。

2. フランス人の生活

前章ではフランスの空間面、背景的な事柄（たとえ歴史であっても、作品として空間化されていた）に、主として、触れたのであるが、ここでは、この空間内で生活しているフランス人の日常生活に属する事柄を見ること

(4) ドルドーニュ県（ペリゴール地方）の県庁所在地ペリグーから 45 km。3 万年前の遺跡が点在する。クロマニヨン人の人骨が発見された所。招き猫然とした悪趣味のクロマニヨン人像が象徴するように、村そのものは観光ずれしつづあるように見えた。

(5) E. R. クルチウス、『フランス文化論』、みすず書房、(1977) pp. 7～8.

にしよう。

バカンス 彼らフランス人のバカンスに対する情熱は伝説的でさえある。彼らにとってバカンスは単なる贅沢ではなく権利の行使であり、自己回復の最大の手段なのだ。日本のお父さん達が、職場で働く時、最も充実しており自分らしさを感じるとすれば、フランス人達は、逆に、労働を自己疎外と考えているのではなかろうか。その証拠に、労働者達は退職年齢の引下げを要求するのであり（勿論、社会保証の充実なしでは出来ないことだが）,

「先年行われたある調査によれば、ルノーの労働者の半数以上は、賃金引上よりも時間短縮のほうを望んでいることが報告されている⁽⁶⁾」。

よく聞かれる次の言葉も、彼らの価値観を知る上で、傾聴の価値がある。

『一ヶ月の休暇を中味のあるものとして過ごすには、われわれの賃金はあまりに低すぎる⁽⁷⁾』。

要するに、金と暇のどちらを選ぶかと言うと、彼らは後者を選ぶのであり、この余暇の充実ということが賃上げ要求の正当な理由となり得るのである。フランス人の夏休み。しかし、これは、過度に羨望視され美化されているかもしれない。学生のように労働者達に夏休みが与えられているというのではないのだ。彼らは、年間の有給休暇（現在、5週間）を、従来、夏にまとめて取ってきただけなのである。なぜなら、夏の海や山が一年で最も魅力的だし、職場で従業員がばらばら抜けるより、いっそもまとめて休みにした方が良かったり等々、フランス人の夏休みは社会習慣化した。しかし、フランス人の中にも、旅行に出るよりは家にいる方が好きな連中はいるし、貯金の好きな人もいるだろうし、夏よりも冬のスキーがはるかに好きという人もいる。第一、バカンスの費用を出せない家庭だってあるはずだ。一ヶ月以上も営業を停止するのは営業政策上まずいと判断する事業所だってあるかもしれない。フランス人の夏休み至上主義はどこまで真実

(6) 宮島 喬、『現代フランスと社会学』, (昭和54), p. 201.

(7) Ibid. p. 202 における引用。

なのであろうか。手元の統計資料に目をやると、1984年で、夏休み旅行に出かけた人は国民全体の53.9%（平均滞在日数24.7日、国外滞在者16.9%）、職業別では、農業従事者の22.2%（これでも、1965年との比較で2.4倍）から、上級管理職、自由業の85.1%まで、職種と収入の差によるばらつきは大きい。居住地別では、地方の町・村の35.7%からパリの79.9%まで、当然の現象であるが、規模の大小と住民のバカンス出発率は比例関係にある。⁽⁸⁾そして、この年の夏休み族は、7月（40.3%）、8月（39.1%）に集中的に移動して（この年に限らず毎年見られる傾向で、俗にグラン・デパールと言う）、前後の5、6、9月はそれぞれ10%に満たない。それでは、この年の冬はどうであったか。全体の26.2%の人が平均ほぼ2週間の休暇旅行を楽しんだのである（パリの人間に限ると、47.4%、18.9日）。⁽⁹⁾以上の数値をどう読むか。判断は人によって異なるかもしれない。羨望あるいは失望。が、皆が皆、夏休みを持つのでないことはわかった。が、それでも、国民の2人に1人が、3週間以上も、山や海その他で労働の疲れをいやし、生の充電をはかったことは事実なのである。⁽¹⁰⁾

今夏、パリでは、従業員が休暇を交代でとって、長期休暇に入らないオフィスが増えた、と聞いた。確かに、かつて経験したフランスでの夏休み（1972、73年は言うに及ばず、3年前）と比べても、夏期営業の店舗、オフィスは目に見えて増えた。しかし、街を歩けば、「年次休暇につき閉店」という手書きのビラが入口に貼ってある個人商店はまだ多いと感じる。この前開いていたクリーニング屋が、今週行くと、一ヶ月の休暇に入って閉店していたとか、いいレストランを見つけて次に行ったら休暇入り、といった例は日常ざらにある。今夏、トゥールで学生達と受けた夏期講習の教師連は9月出発組だった。夏休み返上の一部教師もいるのかと思ひ込

(8) Gérard Mermet, "Francoscopie", (1985), p. 398.

(9) Ibid. p. 393.

(10) 一言付け加えておくと、彼らの休暇の過ごし方は一ヶ所滞在型であり、周遊旅行者は6.9%にすぎない。又、言うまでもなく、日本では4月の年度始めがフランスでは9月である。バカンスは1年の疲れをいやす性格を持つ。

んでいたら、最後の授業の後のお別れ昼食会で僕の先生は、「明日、ギリシャへ出発します」と言ったものだ。その晴れやかな表情が、彼らフランス人にとってのバカンスの意味を、はしなくも、言いつくしていたように思われるのである。

国鉄 (S. N. C. F.) バカンスを見たついでにフランス人の移動手段も一瞥しておこう。御多分にもれず、フランスのモータリゼーションも進む一方のようである。各家庭の車保有率は、1960年で30%だったのが、70年では過半数を越え(58%)、83年現在では73%に達し、そのうち19%の家庭には2台以上の車がある。⁽¹¹⁾現時点ではさらにふえているだろう。しかし、興味深いことには、車保有家庭の年間走行距離は、1978年以来、年々、減り続けている(1978年-13,330 km, 79-13,310, 80-12,990, 81-12,610, 82-12,500, 83-12,400)。⁽¹²⁾道路整備は年々進み、長距離を走る条件は良くなるはずだが、ハンドルを握る回数が減っているのであろうか。原因のせんさくは控えることにするが、彼らは車の使い所をわきまえて、車なしですませられるところはなしですませる理性的なドライバーになりつつある証拠であろうか。いづれにせよ、彼らは、レジャー(特にドライブ旅行)、買物に主として車を使い、通勤に車を使うドライバーは、2人に1人くらいのものだということは言っておこう。

が、気になるのは、車によって客を奪われることになる国鉄である。⁽¹³⁾日本では、政治と赤字の重圧で、分割民営化の試みがスタートしようとしているわけだが、フランスはどうか。国土の面積が日本のほぼ1.5倍、人口が $\frac{1}{2}$ 、人口密度にして $\frac{1}{3}$ というデータからすれば、もし条件が同一なら、フランスは日本の国鉄よりはるかに苦しい経営を強いられるはずである。より広い鉄道網を敷き、かつ、旅客数は圧倒的に少いはずであるのだから。

(11) "Francoscopie" p. 133.

(12) Ibid. p. 135.

(13) 1825年に鉄道会社第1号が発足して以来、発展の一途をたどった鉄道事業は、1937年、政府出資51%、旧会社49%の公営企業体として統合され、現在に至っている。G. Michaud, G. Torrès, "Le nouveau guide France", (1983), p. 302.

ただ、九州、四国、北海道という島を抱かえる日本の国鉄に比べ、首都パリに直結させる形で輸送網を敷けるフランスは無駄が少ないとは言い得る。現に、フランスの幹線鉄道網はパリから放射状にのびていて、地方線はダイヤその他不便きわまりない。東西の距離はわづかでも数倍の距離をかけてパリを経由した方が時間的に早いという場合だって珍しくなく、フランス国鉄はタテに便利でヨコに不便というのが定説である（ついでに言っておくと、パリ駅は6つあって、その間は、東京駅と上野駅、広島駅と己斐駅というように線路ではつながっていない。それぞれ名前の異なる6つの駅が各方面へのびる幹線の始発駅であり終着駅である。だから、駅から駅へは、地下鉄、バス、タクシーなどで移動するほかはないのである）。そして、不採算路線は現在次々に姿を消しているし運行本数は大幅に削られている。1968年から82年までも7,000 km⁽¹⁴⁾が廃止されていて日本の国鉄とは比較にならないほどの合理化が進められている感じである。1980年時点で255,000人⁽¹⁵⁾だった職員の数も、現在、さらに減っているはずである。なぜなら、旅をして気づくことだが、廃止線は無論のこと、駅の数も減り、各駅では改札はなく車内の検札があるばかり（集札はもともと無かったからプラットフォームに駅員の姿はあまりなく地方駅は無人駅の感がある）、コンピューターによるシステムの近代化も含めて人減らしは着実に進んでいるのだから。これに並行して、車両の快適化、T. G. V.（世界一のスピードを誇るフランスの新幹線）の路線延長、新線開発、レンタカーサービスの充実（マイカーごとと旅客を目的地へ運ぶサービスも含めて）、特別列車の編成（バカンス期、観光地を中心とする）等々、経営努力も怠らない。が、やはり、基本は、稼げるところでは大いに稼ぎ、不良部分は切り捨てるということであろうか。今夏、ドーバー海峡を望むノルマンディーの景勝地エトルータを国鉄で訪れた時のことだが、乗換えの客をエトルータ

(14) “Le nouveau guide France”, p. 302.

(15) 日本の場合、1987年、国鉄新会社移行前の時点で、職員数26万である。

まで運ぶ、かつての鉄道にかわる国鉄バスは観光シーズンでもわずか1往復しか走っていないのであった。多種の割引制度を取り入れ利用客確保の努力をしている国鉄だが、この夏のバカンスたけなわの頃、予約なしで汽車に乗ってすわれなかったのが1度きりという経験が示すように、客の減少になかなか歯止めがかからないようである。地方の過疎化とモータリゼーションの波にあえぐ国鉄だが、しかし、国が資本をひきあげ、経営から手を引くという話はついぞ聞いたことがない。

衣・食・住 社会階層の格差を考慮せずにフランス人の衣食住を語るとは危険であろう。職種に従い、収入に従い、それぞれ標準的な暮らしぶりがあるはずである。が、ここでは、所得の統計等、数値に頼らず、筆者個人の印象のみを述べることにしよう。それも時期はバカンスだ。そこから彼らの日常生活を帰納するつもりはない。と、断った上で、しかし、彼らの衣食住が貧しくなった、と言えるのではないかと思う。四季を通じての日本人の服装が年々向上していく感があるのにひきかえ、彼らの服装は変わらない。貧しくなったというのは言いすぎだが、富裕階層⁽¹⁶⁾と小金を持った中年を除いて、全体に無関心なのだろう。夏の街を歩くバックパッカー達は論外だが、日本人だったら、家の中なら良いとしても、外へ出ていくとなったらためらう程の服装だって結構見られるのだ。露出度が高い、という意味ばかりではない。安っぽさが気になるのだ。彼らは日本人よりもはるかに少ない枚数の質の劣る衣服で生活しているように見える。トゥールの研究所の先生達の服装の(良く言って)質実さは印象的だった。一般のフランス人にとって流行は無縁と言って良い。そして、夏ともなれば、パリを除けば、ネクタイ姿の男性は、100人に1人もいない感じなのだ(が、残念なことに、良い服装の日本人より貧相な身なりの彼らの方が堂々としているのは事実だが)。一定の割合でおしゃれがいているのは間違いないが、総じて、彼らは服装に無頓着だ。こう書いて、『フランコスコピー』を見

(16) 例えば、屈託のないバカンス客に混じって、海辺の豪華なマンションかなんかを借りて、毎日、違う水着を着て浜に出てくる連中。

ると、やはり、彼らの衣服費の割合は減っている。1870年→家計費の12%。
1970→8.6%。現在（即ち1984）→6.6%⁽¹⁷⁾。絶対額が減ったことの証明には
ならないが彼らの服装に対する関心の有り様は推測できる。

ファッションの国のイメージがこわれてしまう話だが、では、グルメの
国フランスはどうか。19世紀の初めには独立した芸術分野になった⁽¹⁸⁾と見な
されたフランス料理は、今、現実には衰退しつつあると見るのが正しいと
思う。旧知の家庭へ招かれ、あるいは、生徒のホームステイ家庭へ招かれ
て感じたが、先づ、料理の皿数が減った。皿のボリュームが減った。ずし
んと腹にこたえて消化困難という経験はもうできなかった。ワインの量も、
（質は落ちていないと思うが）、確かに減った。衛生観念の発達、医学の
常識の普及、節約精神のいづれに原因があるのか知らないが、ずい分、摂
取カロリーが減ったと思う。レストランの標準コースは、アントレ（オル
・ドゥーブルという言葉は消えつつある）、肉（あるいは魚）、チーズ、デ
ザートの組み合わせだ。メイン・ディッシュの前が、ポタージュ、オル・ド
ゥーブル、アントレあわせて一つの皿になってしまった感じ。昼食にいた
っては、サラダとパン、ピザやスパゲッティのみですます人がふえている
し、ひどい時は、道端で買ったサンドイッチ、クレープ、菓子パンをほう
ばるだけだ（こういう人ばかりがいるのではなく、又、毎日こんな食生活
ではないと思うが）。高級レストランでも、伝統のソースから淡泊なヌー
ヴェル・キュイジーヌへと、我が国のグルメ批評家が嘆息しつつ指摘して
いる通りの推移を示しているように思われる。レストランの比較では、料
理の質とバラエティーにおいて、日本はフランスを追いぬいたのではある
まいか（家庭料理へのインスタント食品の浸透度でも日本はフランスに圧
倒的な差をつけているが）。しかし、安レストランから高級レストラン、
はては、食べ歩きの人に至るまで、彼らが生きる幸福を漂よわせていると

(17) “Francoscopie” p. 10.

(18) ブリヤ＝サバラン Brillat-Savarin, 『味覚の生理学』“Physiologie du goût” は、
1826年刊である。

ころは、日本人のせせこましさとかなり対照的ではある。

住まいと言えば、南仏の家並のみすぼらしさ、北の堅実さ、リゾート地帯のマンション群などが頭に浮かぶが、インテリアについては多くを知らない。が、ほっといても端正な日本家屋と異なり、石の四角い空間の冷たさを和らげるため、室内装飾にはずい分気をつけているように見える。彼らは飾りつけがうまいと、少くとも、僕は感じている。一方、大都市では、増大する人口をまかなうためのアパートが建てられるが、これは、我が国の住宅を兎小屋と言っけなす資格をフランス人自らが取りあげているんじゃないかと思わせる体のものだ。パリでは、郊外の一戸建に住むのが一種のブームだが、それでなくても、郊外への都市機能の増殖は著しく、それに伴い、高速地下鉄網と国鉄郊外線の整備が進んでいる。

しつけと教育 ひと頃、欧米人のしつけの厳しさがよく言われたものだが、⁽¹⁹⁾他の国の事情はさておき、フランスの親達はずい分子供に甘くなったと思う。旅行中、幼児を連れた親達とよく汽車で一緒になったものだが、公衆道徳を幼い頃から身につけさそうという姿勢の感じられる親は皆無だった。もしかしたら、日本より、昨今あれほどけなされる日本の若い母親より、もっと悪いかもしれない。ぎゃーぎゃー騒ぐ。席を離れて車内を徘徊する。よその客に汚い手で触れる。泥靴で座席にあがる。親はおおきなりの注意を与えるだけでほとんど無関心か、我が子の狼藉をうっとり幸福そうな情愛のこもった目でみつめている。こちらが怖い目をしてどなりつけてやろうと身構えるところへ、「うちの子って素晴らしいでしょう」、という目がにっこり笑いかけてきたりする。子供を抱き取るのでやっとわかってくれたかなと思うと親子が大合唱を始めたりする始末。こちら一人が憤慨しているその一方で、フランス人乗客は、大体において、平然として

(19) 今でも大人の子供に対する物の言いようはつけんどんに聞こえる。あるいは、子供が大人なみの口のききようをしているように見える。これは言語の性格によるのであって感情は関係ない。彼らのしつけの厳しさ云々には、この辺の事情による誤解はないであろうか。

いる。出生率が下がって稀少価値の高まった我が子への盲愛のなせるわざだろうか。社会の閉塞状態が人々の生きがいを、こんな風に、極度にせばめてしまったのか（ちっぽけな家族だけの幸福）。日頃の家庭内の厳しさから解放されたバカンスならではのしやぎぶりだといいいのだけれど。

地方の中学校（コレージュ）の教師をしている友人は、生徒の学力低下を、彼らの授業態度の悪さと共に嘆く。最近ではなぐつたりもするらしい。小学校で留年制度があったり、週休2日制（日曜と水曜が休み）だったり、小学校段階で理解力を身につけて中学校へ来たはずの子供達の実はそうでもないらしいのだ。そのことを裏書きする調査結果が先般公表された。この最新の調査結果によると、⁽²⁰⁾コレージュ1年生（11才）でフランス語（国語）読解能力ありと判定されたのは全体の16%、コレージュ最終学年（14才）でやっと31%に達する程度で、特に12%は文盲だとされている。事情を知らない日本人だったら、これで彼らは大学へ行けるのかしらと心配してしまうが、心配はいらない。彼らは大学に行かないのである（行かないことはないが教育の目的は進学にはない）。1981年3月現在のフランス人の最終学歴を見ると、義務教育を終えただけで何の免状も持たない者⁽²²⁾（制度が複雑で説明は省略するが、卒業証書をもらえなかったようなもの）が、32.1%、初等教育修了証書だけを得た者25.2%、さらに段階的に割合が低くなって、学士以上になると全体の3.8%に過ぎないのである。彼らは学力が低下したのでなくて、もともと、低かっただけなんじゃないかという疑問さえ湧いてくる。学問のための専門知識を得る前に彼らは必要最低限

(20) 9月30日付、朝日新聞。調査結果の紹介と共に、小学生の留年率が12%、卒業までの5年間（フランスの義務教育は小学校5年、中学4年）に3人に1人が留年。又、中学生の読書傾向、まんが1位（50%）といった興味深いデータも見られる。

(21) 『事典、現代のフランス』、(1985)、p. 275。（但し、対象は15才以上となっている。）

(22) 義務教育は16才で終了し、どの段階まで終了したかは問われない。『ロワイヤル仏和中辞典』、pp. 2024～2025 が参考になる。

のことを学んで自分なりの進路を見つけるのだ。教育に不熱心なのではない。個人の生き方に対する考えが日本と根本的に違うのだ。こうして、厳しい競争にさらされることなく能力に合った課程をたどって各人が社会の機構のどこかにおさまっていくコースがあるとすれば、しかし、他方では、秀才中の秀才がしのぎをけずって国家のエリートをめざす競争コースもある。いろんな批判はあっても、グランド・ゼコール（高等専門学校）はそうしたものとして機能しており、政・財界のみならずあらゆる分野のリーダーを供給し続けている。これは一種の階層社会なのだろうか。そうかもしれない。しかし、社会・文化階層の差も、個人の尊厳の観念を前にしては、無効になってしまうような、歴史の伝統が感じられることも事実である。いづれにせよ、身分が上の人、自分より金持の人の前で彼らは決してべこべこしない。

蛇足でつけ加えておくと、1979～80学年度の教育関係予算は808億フランで、これは、国家予算の25%にあたり、最大の費目である。⁽²³⁾

3. フランス人の心性

個人主義 フランス人はおしゃべり好きだし自分の意見を述べるのが好きだ。そして、意見表明でも好悪の判断でも物の選択でも、月並であることを恐れているように見える。エスプリが磨かれてゆく所以であろう。自己の独自性、他の人と異なる点をこそ、彼らは強調したがっているように見える。車やパカンスに関して画一化現象があるように見えるかもしれないが、彼らは決して他人を模倣しているのではなく、自己の必要から、あるいは、権利の行使という観点から、決定を行っているのだと言えると思う。彼らが車をファッションの一部と考えているのではないことは、型の古さ、手入れの悪さ、一言で言って、汚なさを見ればわかるし、自前のパカンスということは彼らがツアー旅行を無視している事実からもわかる（昨年夏のパカンス旅行者612名へのアンケート結果では、グループ旅行

(23) 『事典、現代のフランス』, p. 259.

6%, すべてこみのパック旅行3%, 89%は個人旅行である⁽²⁴⁾。しゃべりたがりの例としては、少々古い話だが、磯村尚徳・深田祐介の対談に出てくるエピソードを紹介しよう。「ホロコースト」(アウシュビッツ強制収容所のドキュメント)放送後、ゲストによる感想座談会が持たれたのだが、1時間の放送予定が4時間にも伸び、午前1時半頃になってやっと司会が打ち切った、という話⁽²⁵⁾。他の放映予定番組がすべて没になってもゲストは自己の意見を述べ、局側はそれを許しているのである。そこには、扱われた内容の重大さ、各人の意見の尊重という二つの価値判断が含まれている。この「ホロコースト」の例に限らず、概して、彼らは、提出されたある問題(政治、経済のテーマであれ、話題の映画、演劇、音楽、文芸作品であれ)に関して、討論するのも、それを聞くのも、並々ならぬ関心を持っている。誰もが、すぎあらば割こんでいって自分の意見を述べようと機をうかがっている雰囲気がある。フランス人のアンケート好きも、こうした傾向を物語るものだと思う。新聞、雑誌は、毎号、何かのアンケート結果を載せている。それぞれの読者層にしたがって選ぶテーマそしてアンケート結果に歴然とした偏りがあるようであるがくわしく調査していないので紹介はできない。が、全般的に、好悪の判定が現われてくるもの、政治家の支持不支持、話題作の優劣の評価等々が好まれているようにみえる。日刊紙『フィガロ』に毎日出ているゴールデンアワーのテレビ視聴率は、何チャンネルの番組○○は、××%という形で示されているが、「8時30分以後」という項では、わざわざ、視聴者の番組に対する満足度までが20点満点で示されている⁽²⁶⁾。彼らはこの採点法が好きなのだが、思うに、結果として現われるランク付けのためよりも、採点する快樂を楽しんでいるのではない。アンケートはある結果を得るために存在するのではなく、フランス人

(24) “Le Figaro magazine” No. 314, (1985, 11月9日～15日号), p. 193. 余談ながら、『キャルフル・デュ・ジャポン』というフランスツアー旅行団が毎年日本へやってきて広島へも滞在している。

(25) 磯村尚徳、深田祐介、『セヌで語ろう』,(昭和55年), pp. 140～141.

に態度表明のきっかけを与えるため、即ち、精神衛生上の効用のために存在するのだと、僕は、秘かに考えている。

彼らにとっては、何よりも自分の意見、自分の判断が大切なのだとすれば、彼らが年齢を問題にしないこと（長幼の序はないのだ）、義理人情のしがらみに全く無縁だということは当然のこととなる。彼らはある人の意見に敬意を払うのであって年齢に払うのではないし、ある人に屈するとすれば、それは人間関係に動かされたのではなくその人の意見に説得されたからである（コネ＝ピストンが無いというのではない。それは又別の問題だ）。フランス語をしゃべらない人間への彼らの冷淡さは、だから、論理的でさえある。よく言われるような母国語への愛着などではない。又、外国人への差別感情でもない。自分の意見を伝えられない、あるいは、相手の意見が伝わってこない、という関係など彼らには関心がないのだ。ちょっとフランス語で話したら、今まで無愛想だった相手の表情が急ににこやかになり態度が急に友好的になった、という体験談はよく聞かされる。その時、彼らは、コミュニケーションのスタート台へと我々を誘っているわけである。

フランス人のジレンマ 個の尊重は何によって保証されるか。それは、憲法によって保証される以前に（『……フランスは、出身、人種または宗教による区別なしに、すべての市民の法律の前の平等を保証する……』⁽²⁷⁾），単純に、他の尊重となって現われるはずである。自分が自由であるためには他の自由も等しく認めるべきである。こうして、自己の主張は偏狭に向うのではなく、逆に、寛容へ向うことになる。個人のあらゆる才能が花開くフランスというイメージを持つとしたら、それは、原理的には間違っていない。宗教戦争＝不寛容の時代は過去の遺物だ。いろんな人種、いろん

(26) 参考のために書き添えておくと、1986年9月5日（金）の調査結果では、300人の調査対象者のうち、8時以前では、70%（200人余）がテレビを見ていない。8時30分以後でも30%が見ていない。テレビ漬けが問題になっても彼らはまだまだ我々の比ではない。日本のテレビがはるかに楽しい証左かもしれないが。

(27) 第5共和国憲法第2条。

な宗派の人間が堂々と胸を張って歩くのだ。

ところで、現実はどうか。今年3月の下院総選挙では、人種差別を公然と唱え、移民追い出しを図る極右政党「国民戦線」(F.N.)が、先の大統領選挙で社会党に協力してミッテラン大統領を生みだした共産党とほぼ同数の得票、したがって、議席を得たのである。比例代表制の産物とも言われるが、ともかく、(今までの文脈で)非フランス的と言える政党がゼロから一気に35もの議席を得たのである。フランス人は人種差別者になろうとしているのか。この現象は、確かに、社会情勢の反映ではある。かつて労働力の不足を補ってきた移民労働者が、今や、フランス人の失業の元凶とみなされるにいたった。犯罪の多発、社会不安。他を尊重するはずのフランス人に責任がないとすれば、やはり、それはよそ者が原因なのだ。個の尊重以前に、自分達の生存がおびやかされていると感じる底辺のフランス人達、閉塞感に悩む若者達が、一部本物の狂信者の支持に走る以外に道を見出せなくなっているのであろうか。

ともかく、フランス人達は、外国人を受け入れてきた。政治犯をも寛容に受け入れてきた。自国内で犯罪行為を行うのでなければ、彼らは、政治信条を問題にして、他国籍者を追い出すという事はしなかった。自由の国、フランス。ところが、今年9月、フランスは、というかパリは、相つぐテロに見舞われた。今回の一連のテロ(2週間で6度の爆弾テロ。死者10人。重軽傷者162人)の背景には、現在フランスで服役中のアラブのテロリストの釈放問題がからんでいる。彼らの釈放と昨年レバノンで誘拐された仏人外交官との相互の釈放が合意されていたのが、後者のみ釈放されて、アラブ側の要求が実現されていないというのだ。昨年からのアラブ人によるテロ行為の背後にはこの問題が密接にからんでいると言われる。フランス側には、彼らがアメリカとイスラエルの外交官暗殺に関かわっているら

(28) 1958年から前回選挙(1981年)まで続いた小選挙区2回投票制が、今回は、ミッテラン大統領下の選挙法改正で県単位の比例代表制で行われた。が、保革逆転になった議会で、先頃、再び小選挙区制に再改正されたばかりである。

しいという、釈放に踏みきれない理由がある。が、対リビア政策にしてからがそうだが、シラク首相ひきいる保守内閣のアメリカ寄りの姿勢が鮮明になるのに比例してテロが激しさを増したという事情もある。自主外交に徹したドゴール大統領以来の伝統——フランス人の自我意識を国家規模に拡大した独自の個人主義的対外政策は保革共存政権（コアビタシオン）下で変質しようとしている。社会党の大統領ミッテランと距離をおこうとするシラク首相のあからさまなアメリカ寄り政策は、フランス人氣質に合ったものという風には見えない。テロ対策の基本は、フランスがアメリカの手先だという誤解をときほぐし、お互いの意見を聞くことからやり直そうと試みることにあると思うのだが、領域外のことを根拠もなしに、したり顔に語ることはやめよう。とにかく、自己が自由であるために他者の自由を進んで認めようとするフランス人達が他者の自由を抑え（外国人労働者しめ出し）、あるいは、自己の自由をおびやかされる（テロの脅威）事態に立ちいたっていることは現実の一面なのだ。

消費社会としての立ち遅れ フランスにも先端技術は無くはない。世界一のスピードで走るT. G. V.。コンコルド旅客機だって。優秀な武器（『エグゼ』ミサイルの優秀さはサッチャーさんを激怒させたではないか）。自前の核兵器（荒木市長の抗議電報の数を見よ）。原発先進国（将来の電力需要の80%をまかなうだろう）。米・ソと張り合う（どこまでは行っていないか！）宇宙開発。エイズの治療（ハリウッドからわざわざ患者がやってくる）。さがせば、まだまだ色々あるだろう。ブルターニュの潮汐発電所へは中国電力が視察に行っているはずだ。が、しかし、フランスで短期でもいい生活してみると、経済の沈滞がひしひしと伝わってくる。服装、食事が貧しくなったのではないか、という感想はすでに書いた。通りに人があふれても札束を持って店で買物をする気配がない。倹約家とかなんとか言われるが、確かに、ぱっぱと気前よく買うところがない（それをやるのはほんの一握りの大金持だ）。今夏は、以前から習慣になっているものか今夏だけのものかよくわからないが、ごてごてした、日本の平

均的チョコパフェの倍のボリュームのアイスクリーム（値段もちよっとした料理並だったが）が大流行だったのにびっくりしたのと、黒板消しを見かけたのが発見だった（チョークの字は、車のフロントガラスをふくように、ボロ切れで消すかスポンジで消すのが今までは普通だった）。人がとびつきそうな便利なものを作ってひと儲けしようという考えがフランス人にはないのか、いくら便利なものにも消費者がとびついてくれないのか、商品に進化が見られない。確かに、彼らの個人主義からすれば、他の人に似たくないわけだから、爆発的なヒット商品は生まれにくいだろう。あるいは、物質の利便性に屈するのは精神の敗北だどこかで考えているのかもしれない。いづれにせよ、消費社会としての立ち遅れは歴然としている。日本は、生活の便利さ、物の豊富さでは、断然フランスを追い抜いている。よそ様が持っているものは人並に自分も持ちたい、あわよくば、差をつけたい。そして、物を買うために、より多く働き、より多くお金を儲けたい、と、日本人は考えるのではなからうか。そして、自社製品をより多く売するための営業活動（店頭セールスでも、訪問セールスでも）、無駄なもの不必要的なものでも巧みに売りつける技術。フランス人には、これができない。先づ、買いたくない人には売らない。希望に合わなければ客は買わない。店は売らない。労働観はすでに述べた。これではG. N. P. が上がらないはずである。日本ならどんどん建てかえて立派になる市庁舎が、誇張して言えば、フランスでは、町で一番古くて由緒あることを自慢にする建物である。地震もないし石の家なら建て替え需要もない。道路その他も、残念ながら、改修の必要がないほど当初から完璧に作られている。公共土木事業も少いわけである。どう転んでもG. N. P. で日本にかなうはずがない。むだなものまで生産して売ることがおりこみずみだから、国内で消費できなければ外国へ輸出して経済まさを起こす。もう引き返せないのだろうけど、日本は、進化の過程で道を間違えたのではなからうか。消費文化の方へ新たに進化できずにもたもたしているフランスの方が運が良いのかもしれない。国際収支のバランスをとるため、酒税を下げろ、無くせ、とか

武器輸出にはげむとか、世界経済面での苦労はあっても、輸出競争よりも（勝てないと観念したのか）、フランスは、観光政策に重点を置き始めたようである。日本人も勿論、この方面では、多大の貢献をしているのは周知の事実である。アラブゲリラのテロ攻撃はフランス政府にとって厄介な問題ではあるが、その前に、フランスにとっては、経済的に打撃であろう。アメリカのリビア政策に同調して、フランスがテロの標的となって以来の観光客の減りようはフランス人の心配の種である。テロだけではない。チェルノブイリの原発事故。ドルの下落。不安材料はいくつかあった。1986年8月16日～17日付の『ル・マタン』紙は、観光客減を《事件》として2面3面（但し、この新聞はタブロイド版）で扱っている。3面の見出しは、「50億フランの減収。1985年、約300万人のアメリカ人観光客が、今年は200万人。つけは重い」。又、南米からの観光客の増大と共に、日本人が、短期滞在の《カミカゼ》型だが、相かわらぬ得意客であることが、ベルサイユの噴水の傍に疲れて腰かけた農協風の眼鏡のおじさんの写真と共に紹介されている。

歴史と文化の発見へと人を運ぶ交通機関、土産物の売り上げ、ガイドその他の雇用。自己を表現しつつお金をいただく観光業こそ、何だか、フランス人にぴったり、という気がする。

結 び

今夏のフランス旅行を出発点として、フランス文化論のおさらいがてら、フランスの諸相に触れてきた。フランス人達が人生に求めるものが我々といささか異なるのではないかという実感が残る。それは、短絡的に言えば、行政の中央集権的枠組に対抗するかのごとき彼らの個我意識、非順応主義に端を発するものかもしれない。が、しかし、書き連ねていくうちに内容が次第に歪んできた感も否めない。先づ第一に、いろんな項目を未消化なままに並べすぎた。いろんな面を紹介しようとしてつつこみが足りないことになった。一方では、フランス人の生活・心性の面で、まだまだ書か

ねばならないこともあった。それに、ひるがえって、一般のフランス人は、日本と日本人にどんなイメージを持っているのかという問題にも、一個の、筆者なりの観察を述べるべきだったろう。結局、フランスの現状の分析として、この雑文は、いろんなレベルで中途半端に留まった。言わずもがなだが、この感想文は、フランスという多面体の一面を不十分にしか語っていないのである。

又、記述の中には、現実と異なる点もあるかもしれない。事実を歪曲したわけではない。個人の経験には限界があるということだ。地方の真実をよく描こうと思えばパリはおろそかになる。パリを頭に描きつつフランスを見る人とのフランス観に差ができざるをえない。又、今年の夏の真実が、常に、いつでも、どこにでもあてはまる真実であるとは到底言えない。観察者の主観の差。感受性の差。そして、捉えるべき対象は時間の中で刻々と変化しているのである。不変の真実などつかむべくもない。恒常的なフランス像を提出しようという気は毛頭ない。むしろ、どんなガイドブックにもくり返し現われてくる類の記述は避けたつもりである。が、誤解を正そうとして新たな誤解を作り出す、ということは、往々にして起こる。クルチウスが提唱した《文化論》が待たれる所以だ。「フランス文化の個々の事実内容を記述するのではなく、フランス文化の一般的な評価様式および観念体系をまとめあげること、云々」。

しかし、この未消化、中途半端という印象が、逆に、一国の文化に固定したイメージを押しつけることの可否を問うきっかけになり得たかもしれない、という希望はある。100人の日本人がフランスを見て、100の異なる、未消化・中途半端なフランスのイメージを作りあげるとすれば、それは、全員一致の輪郭鮮やかなイメージが出来あがるよりずっと健全なことかもしれない。大切なことは、異質な文化の方へ関心が向くということではなかろうか。自国の“たくましい文化”に陶醉するのではなく、他国の文化にも自国の文化にも、同じだけの距離をもって、先入感なしに、冷静に、アプローチするべきだ。

と言いながら、ところで、あれこれフランスの事を述べて、さて、日本はどうだったかという疑問につきあたる。そして、文化論とは、自己の依って立つ基盤の検証にもどってくるものなのだ、という事に、改めて、気づくのである。そういう風にならない事態をこそ“文化の退潮”として憂えうるべきではなかろうか。

(1986年12月)